

氏名(本籍地)	星野友美子(東京都)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第63号		
学位授与年月日	平成24年9月30日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	人工内耳装用児の言語学習活動 事例による授受表現の学習		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	徳永 美暁
	(副査)	昭和女子大学教授	金子 朝子
		昭和女子大学特任教授	石橋 玲子
		東海大学教授	北野 庸子

## 論文要旨

本論文は、日本人の人工内耳装用児の日本語習得を促す学習活動の事例研究である。先天性の最重度感音性難聴児が人工内耳を装用しても、健聴児のように聞こえる訳ではないため自然に母語を習得することはできない。聾啞者の言語習得についての文献では、抽象的な概念が導入され始める小学校4年生頃から学力が伸び悩み「9歳の壁」があると報告されている。執筆者の人工内耳装用の子供A子が9歳に差し掛かり助詞の脱落や語彙の不足、「くれる」や「もらう」の不使用などが目立ち始め、母親である執筆者が、強い焦りを感じたことが本研究の動機となっている。本研究は、人口内耳を装用した子供が、日本社会で健聴者として円滑なコミュニケーションを通して人間関係を構築しながら生活をしていくために不可欠な授受動詞の習得を実現させるための学習活動を行った事例研究である。本研究は、人口内耳装用児の世界では初めての母語としての日本語教育、主に「授受動詞の習得」を焦点にした本格的な研究であり、人口内耳装用児だけでなく、聾啞の子供の母語教育に一石を投じ、画期的な意識改革を促す貴重な研究論文である。

日本語の授受動詞には、「あげる」「くれる」「もらう」があるが、授与者が主語の位置に置かれる場合は、「あげる」と「くれる」が使用される。また、受益者が主語の位置に置かれる場合は、「もらう」が使用される。授受動詞で表される物や他者の行為の方向は、授与者から受益者であるが、文形式は「あげる」と「くれる」の場合は、授与者が主語、受益者は非主語、間接目的語である。しかし、これらの動詞がもつ意味は、物や他者の行為の方向が、単に授与者から受益者であるということだけではない。例えば、「くれる」の場合は、受益者が話者自身や自分の家族や心情的に近い「ウチの者」であることも示す。更

に、「くれる」の使用は、単に授与者から受益者への物の移動や他者の行為が「話者・ウチの者」だという方向を示すだけでなく、受益者である話者の授与者への感謝やねぎらいをも表わすことになる。

A子は、「くれる」を使用しないばかりではない。彼女の「お父さんが見に来てもらいました」のような「もらう」の誤用は、日本語学習者の誤用、「国のお母さんが送ってもらったんです」（市川、2010）と類似している。このように、授受動詞は移動の方向だけでなく話者の親疎の情も表わすため、その語用は難しい。幼いころから洪水のように耳に入ってくる母語を使用しながら、親に矯正され、少しずつその意味概念と自分と他者との関係を把握していくことによって習得することが出来ない難聴児には尚更である。そこで、執筆者は、人工内耳装用児のA子に家庭で会話や読み物や4コマ漫画や作文などの学習活動を通して段階を踏み、習得へと導いた過程を詳細に記録し分析・考察している。

方法は、第1段階として、母親である執筆者が授受動詞の使用が不可欠な話題を提供し、間違えた場合に否定・補足・確認・聞き返しなどのフィードバックを与え、本人に正用を促すことから始めた。学習活動は3段階あり、それぞれに自由会話・漫画や物語の内容について話す・書く活動を行っている。それぞれの段階での活動には、更に何種類もの活動があった。A子が間違えた時にする執筆者の聞き返しに対しては、最初の段階では、聞き返されたことにより間違えたことを認識し消去法で答え正解に至るというストラテジーを使用するため、執筆者は、視覚的に授受動詞が示す行為の方向などを図示し理解させたり、話者であるA子が誰の視点にたち述べているのか、また、誰に共感をして話しているのかなどを確認させたりすることで、動詞の意味を整理し論理的にも理解させるという方法も取っている。ステップ1では、自由会話で執筆者が話題を提供し動詞を補わせるように仕向けるといふもの、漫画に登場する子供に視点を当て、その子が他の登場人物に何をしたか、また、他者がその子に何をしたか、など内容について聞いていく中で授受動詞の使用を促すなどであった。段階が進むにつれ教材も、主人公の子供に共感できるような内容になり複雑になっている。本論文には、3年に渡り、授受動詞の方向性の把握から、授与者に視点を置いた場合の語の選択、自分が受益者になったときの気持ち、またウチの者が受益者になった時の授受動詞の選択などが、自然にできるようになるまでの学習活動が詳細に報告されている。

執筆者は、この活動を行うために先行研究を詳細に当たり、海外の聾啞者対象の研究結果も参考にし、第二言語習得で提唱されているフォーカス・オン・フォームの考え方を取り入れ、A子に学習対象の語の存在と意味機能への「気づき」を促すことに細心の注意を払い導いた結果、A子は授受動詞を語用的に適格な使用ができるようになった。以下は、その例である。

1. 妹のK子に自分の宿題を提出しに行ってもらいたい時に、「明日K子に宿題を出してもらうね。K子、出してくれるよね」
2. （人工内耳の電池を注文したら、多く送ってくれたことへの御礼状）

一箱よぶんにくださって、ありがとうございました。

3. (ミュージカルに招待されたことへの御礼状)

とてもおもしろかったです。友達が紙に書いて教えてくれたので、だいたい話は分かりました。また招待してくれるとうれしいです。

本研究は、先行研究から人工内耳装用児の誤用が日本語学習者の誤用に似ていることを知り、第二言語習得の手法であるフォーカス・オン・フォームを採用し、学習項目である授受動詞、特に「くれる」の習得に焦点を当て、丁寧に学習活動を行い、適切なフィードバックを与えることで、授受動詞の習得に導くことができるようになったという結果までの方法論と教材の使用法、A子の学習活動への動機付け、指導者としての姿勢・対応の仕方を克明に記述し、今後の人口内耳装用児のみならず聾啞者の日本語教育への提言も行っている。本研究は、聾啞者の日本語教育に光をあて、更なるコミュニケーションツールとしての日本語のきめ細かい指導法が編み出されて行く大きなきっかけとなり、人工内耳装用児のみならず聾啞者の母語としての日本語教育に貢献する重要な価値のある研究であると判断する。